

「アルプス席の母」を片手に

「本当は女の子のお母さんになりたかった」

こんな書き出しから始まる波乱の物語「アルプス席の母」に涙した高野です。高校野球を母親目線で書かれた小説です。

母と子、背番号をもらうためのレギュラー争い、そしてケガ、親同士の確執、指導者と子ども、そして親。野球に限らず、子供に団体競技をさせている方なら間違いなく、「あ～それぞれ、面倒そう」って感情移入出来る物語です。

登場人物はみな個性豊かで、最初はチョット「この人どうなんかな？」と思える人も何故か最後は憎めなくなるのが不思議です。球児たちと共に成長していく親や指導者の姿がよく描かれています。また推理小説のように巧妙に仕組まれた物語なので、最後の最後はウルっとすることでしょう。

そして、まさに今、この物語と重なる現実のドラマが、青森でも始まります。

子どもの頃、野球少年だった私も今は息子がサッカーをしている関係で、スポーツ観戦といえばJリーグばかり。そんな私が野球で唯一「推し活」をしている青森の聖愛学院が今年もまた甲子園を目指すのです。

私が初めて聖愛学院、原田監督のことを知ったのは、或る経営者団体での講演がキッカケでした。(この講演 DVD はとても感動的で多くのスポーツ指導者に見て欲しいので、私が主催する経営者団体のモーニングセミナーで7月26日に視聴します。ご興味ある方はぜひ気軽にご連絡ください。)

原田監督は弱小チームだった聖愛学院を強豪校に育てあげ、甲子園で敗れた際も試合後に見せた「美しすぎるお辞儀」が、YouTubeでも話題になりました。

一礼の所作に宿るのは、相手校への敬意と支えてくれる人々への感謝。彼らの見事に揃ったお辞儀には「チームの一体感」と「人間力」がにじみ出ています。

そして今、原田監督は「ノーサイン野球」という選手の自主性を重んじたプレイを指導されてあると聞きます。指示がなくても選手自らが状況を判断し、行動する習慣を身につけることが狙いなのだとか。

ここ数年、あと一步、甲子園に届かずという状況が続いていますが、今年こそ「ノーサイン野球」で選手が自らの力で予選を突破し、甲子園で「美しすぎるお辞儀」を見せてくれることを楽しみにしています。

そして今年はグラウンドで活躍する選手だけでなく、「アルプス席の家族」にも注目して観戦します。スタンドで応援する親御さん達の気持ちに心を重ね合わせて高校野球を味わおうと思います。